



Title	アドルノの音楽美学：非同一なものを経験
Author(s)	高安, 啓介
Citation	大阪大学, 2002, 博士論文
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/1332">https://hdl.handle.net/11094/1332</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	高 安 啓 介
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 16656 号
学位授与年月日	平成14年2月19日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科芸術学専攻
学位論文名	アドルノの音楽美学 -非同一なものを経験-
論文審査委員	(主査) 教授 神林 恒道  (副査) 教授 森谷 宇一 教授 根岸 一美 教授 上倉 庸敬 助教授 藤田 治彦

#### 論文内容の要旨

アドルノ Theodor Wiesengrund Adorno (1903-1969) の思想にとって音楽がどれほど重要な位置を占めているかは、その著作集全20巻のうち8巻分が音楽に関する著作であることから想像に難くない。本論文は、そのアドルノの音楽美学が21世紀の現代もなお意義をもつことを主張する。そのために、①作曲、作品、受容という三つの側面すべてからアドルノの音楽美学に光をあて、②アドルノ死後の前衛音楽を視野におさめて、アドルノの精神が新しい音楽のなかにどれほど生きているか、あるいはどれだけ通用しなくなっているかを観察し、③アドルノの音楽美学をつき動かしている哲学思想上の動機を明らかにした。論文の本文は88頁、譜例・註を入れて全100頁、書式は1頁36行で1行50文字、400字詰原稿用紙に換算してほぼ450枚にあたる。

現代音楽における前衛は、伝統音楽やポピュラー音楽からの距離によって規定され、この距離によって独自の力を発揮するが、その前衛音楽が既存のものとの接触を拒むあまり社会のなかで孤立すれば、距離をとろうとする努力自体がむだとなる。この矛盾に敏感だったアドルノは、不定形音楽 *musique informelle* の理念をかかげ、前衛音楽に対して一つの方向性を示唆したのみならず、前衛音楽が既存のものから距離をとることの意義をも深めた、というのが本論文における一つの要旨である。

不定形音楽は単にシェーンベルクの音楽を回顧するだけではなく、未来に開かれた音楽像を打ち出している。アドルノは、現代の前衛には必ずしも自由が見いだせないと批判したうえで、ポピュラーなものを排除するのではなく、むしろポピュラーなものを吸収すべきであるというが、その主張は実は、作曲の方向性を示唆するとともに、独自の時代診断にもとづいて近代の理性のありかた、主体の経験のありかたまでを問うていると、本論文は解き明かす。ついで論者は、1970年代以降の前衛音楽を代表するラッヘンマンを分析し、沈黙や噪音という、アドルノがほとんど思いもしなかった要素が素材となっただけではなく、そうした異質なものを音楽の仮象性格を暴くものとして取り込む点において、ラッヘンマンはアドルノに共通することが指摘される。アドルノの音楽美学がいまなお前衛音楽のもつ矛盾と可能性を明るみに出す一例である。

本論文のいま一つの主旨は、アドルノが音楽をひとつの経験のモデルと考えていたことを明らかにする点にある。音楽について経験といえば、まずは聴取のことが問題として考えられがちである。しかし、それより以前、アドルノにとって問題なのは、作曲という行為のなかでなされる経験であり、音楽作品のなかに痕跡としてとどめられる経験だった。この主旨にそって本論文は、第一章で不定形音楽の理念を取り上げて、作曲について論じ、そのなかで、わ

れわれの経験にとっての構成の問題をみついている。第二章は、アドルノのワーグナー批判を取りあげて、作品の存在について論じ、そのなかで、われわれの経験にとっての仮象の問題をみついている。そのうえで第三章において音楽の聴取を取りあげ、それを論じて、われわれの経験にとっての崇高の問題をみついたのである。

第一の要旨をたどりながら、第二の主旨を論じ、本論文はアドルノ音楽美学の全体像を浮かび上がらせる。これを要するに、アドルノにとってもっとも重要なことは、近代の理性がいかに支配の道具であることをやめ、いかに非同一なものを経験するにいたるかという問題であった。本論文はそのことを明確に呈示する。

### 論文審査の結果の要旨

本論文は、一方でアドルノの「音楽」美学を問いつつ、他方で「アドルノ」という思索の意義を追い求める、といふ意欲のかつ技巧的な論理をくわだてている。内容の要旨に見るとおり、その企ては十分に、またあざやかに実現されたと判断する。

音楽のモダンが伝統音楽やポピュラー音楽に対する距離によって測定されるとするならば、音楽のポストモダンはコラージュのような手法によって、あるいは感情美学に訴えることによって、あるいは新しい簡潔さ *Neue Einfachheit* を求めることによって、そうした距離を解消していく立場だと見ることができる。そう考えるならば、今日の状況にあってはモダンとポストモダンを越えた一つの態度のとりかたを模索しなければならない。本論文は、そうした態度のとりかたを第二のモダンとよんで、アドルノの理論に少なからず含まれているその可能性を浮かび上がらせた。論者の見方に賛成するか否かは別にして、本論文のアドルノ分析は説得力に富んで十全であり、現代芸術を見とおす視野は一貫して示唆にあふれている。

アドルノは音楽を経験の一つモデルと考えていた。論者のこの着眼が、本論文の錯綜した重層的な論理展開を、あざやかな成功に導いたといえよう。アドルノにとって経験とは、反省された理性のいとなみであり、それ自体において一つの行為であった。経験は、あたえられたものの構成をとおして成立するからである。構成とは、図式を上からあてはめるのではなく、所与のもの強制に逆らわぬ下からの構成でなければならない。そうした構成によってはじめて経験は成就する。このとき経験の対象は、真なるもの、なかんづく非同一なもの、他なるものである。非同一なものとは、全体のなかにあつて全体に解消されないものの謂いであり、また自己にとって未知のもの、異質なもののことである。その経験こそもっとも濃密な経験となろう。全体のなかの矛盾や細部に目をつむることは、経験とはほど遠く、また、すでに馴染みのものと出会うことは経験というよりも確認である。このように論じ来たって、本論文第一の独創は、音楽美学から出発してアドルノの思想全体を首尾一貫して把え、現代思想におけるアドルノの意義を、まことに有効射程ひろく明らかにしたことにある。

「非同一なもの」が具体的に何を意味するかという点で、本論文の解明は行き届かないところがある。しかし、そうした問題自体、本論文があつてはじめて明らかになったことである。よって、本審査委員会は本論文を博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。